

# 大阪府と兵庫県に存するドイツ関連史跡の総合的検討

小 原 淳

## 要 旨

日本には多数のドイツ史関連史跡が存在する。筆者は既に 1000 以上のそうした史跡——景勝地、建造物、博物館、資料館、コレクション、記念碑等——を確認している。本論文では、大阪府と兵庫県に存する 7 つの史跡を取り上げ、その歴史的背景を論じる。

(1) では、1880 年に起こった釈迦ヶ池遊獵事件と前年のヘスペリア号事件について論じる。(2) では、大阪市内に残るバウハウス様式の建築物について考察する。(3) では、日露戦争に従軍したドイツ系ロシア人を検討する。(4) では、1938～39 年に宝塚少女歌劇団が行ったヨーロッパ公演を検討する。(5) では、三木清と和辻哲郎という、ドイツ留学経験を有する二人の知識人を論じる。(6) では、音楽学者の田中正平の生涯を紹介する。(7) では、加藤弘之の生涯と日本におけるドイツ学の始まりについて分析する。

## Comprehensive Research about Historical Sites Related to Germany in Osaka- and Hyogo-Prefectures

OBARA, Jun

### Abstract

Many historical sites related to German history exist in Japan. I have already identified more than 1,000 that include, scenic spots, buildings, museums, archives, collections, and monuments. In this paper, I choose seven German-related historical sites in Osaka- and Hyogo-Prefectures, and I explain their historical background.

In the section (1), the Syakagaike affair in 1880 and Hesperia affair in 1879 are discussed. The section (2) examines the Bauhaus style structure in Osaka, Osaka City Industrial Arts High School. In the section (3), I discuss the Russia Germans at Russo-Japanese War. In the section (4), performance tour of Takarazuka Revue in 1938-1939 are examined. In the section (5), I investigate the two intellectuals who had studied in Germany, Kiyoshi Miki and Tetsuro Watsuji. In the section (6), the life of a musicologist, Shozo Tanaka is introduced. In the section (7), the life of Hiroyuki Kato and the beginning of German studies in Japan is analyzed.

## I. はじめに

筆者は、日本全国に残る日独交流関連の史跡・史実を地域別に提示し、日独関係史の再検討を行おうとしている<sup>(1)</sup>。本稿では大阪府、兵庫県の 7 件の事例を取り上げる。

本研究では、対象を現在のドイツ連邦共和国に属する地域に限定せず、オーストリア、東欧地域、スイス、またドイツ系ロシア人や、アメリカに渡った

ドイツ人移民なども扱う。本論文では関連史跡・史実の一覧を最後に掲載し、そのなかでも、史跡の保存状態が比較的良好であること、文字史料が一定程度残されていること、ドイツ史研究・日本史研究者のあいだで詳細がよく知られているとはいいがたく、今後さらなる検討が必要であること、単なる「奇談」の類ではなく、日独関係史の再考に結びつくような問題を含んでいることといった諸要件を満たしているものについて、本文で詳論する。紙幅の都合

から史料、参考文献への言及は最小限にとどめる。  
また、日付は陽暦で表す。

## II. 大阪・兵庫に存する史跡・史実

### (1) 明治12/13年の二つの外交問題<sup>(2)</sup>

フリードリヒ三世 (Friedrich III. 1831-88) の次男、ヴィルヘルム二世 (Wilhelm II. 1859-1941) の弟で、「船乗り皇子」として国民的人気のあったハインリヒ (Heinrich v. Preußen 1862-1929) は、海軍士官候補生だった十代の頃に世界旅行を行い、1879～80年に日本を訪れている。1878年10月7日にコルベツト艦「プリンツ・アーダルベルト号」でキールを出航したハインリヒ一行は、大西洋、太平洋を経由して、翌年5月23日に横浜港に到着した。東京で明治天皇 (1852-1912) に謁見するなどの礼典をこなし、夏場に北海道とウラジオストクを巡航して9月に再来日、日光、京都、大津、坂本、宇治、奈良などを周った。この年、京都ではコレラ流行のため祇園祭が11月に開催されていたが、さらに期間を延長して、入洛する皇孫ハインリヒを迎えた。

冬季を長崎で過ごしたハインリヒたちは、1880年1月9日に神戸に寄港した。コルベツト艦の修理中だった2月7日、ハインリヒは同乗の軍人2名、神戸在住のドイツ人商人1名、日本人の勢子や人足6名を伴って、大阪府島下郡小路村 (現在の吹田市) の釈迦ヶ池でお忍びの鴨猟を行った。吉志部神社から近いこの場所は、「禁猟制札ノ場所」であった。

水鳥を狩り立てようとするハインリヒ一行は、これを見とがめて注意した村人と喧嘩になった。怪我

人を出す争いとなったところに巡査が駆けつけ、一行の氏名を確認しようとしたがドイツ人たちは答えようとせず、身元が確認されるまでの数時間、大阪府庁に留め置かれた。一行は、川口居留地の商人ハイトケンパー (Georg Fr. H. Heidkämper 1843-1900) に引き取られ、その日の夜に神戸に帰った。

事件の二日後、大阪府知事が神戸のドイツ領事を訪れて謝罪し、ハインリヒもそれ以上の対応を求めなかったため、事態は穏便に片付くかと思われた。しかし2月13日、東京から神戸に派遣された外務省の書記官が面談したところ、狩猟に随行したハインリヒの侍従ゼッケンドルフ (Albert v. Seckendorff 1849-1921) は激しい怒りを示し、日本側に対して正式な謝罪を要求した。かくして翌日、ハインリヒや艦長、ゼッケンドルフの列席のもと、吉志部神社で謝罪式が行われ、巡査8名に免職、警部5名に俸給停止1ヶ月の処分が与えられた。新聞各紙はこの日本側の対応を弱腰であると批判し、対して政府は讒謗律によって各紙を罰した。

事件後に東京に帰ったハインリヒは、4月1日に天皇に謁見して事件に対する遺憾の意を伝えられた後、同月5日に横浜を出港、帰国の途についた。ハインリヒは1899年、さらに1912年にも日本を再訪して、明治天皇の大喪の礼にドイツ代表団の一員として参列している。

先行研究には、この釈迦ヶ池遊猟事件が1891年の大津事件に影響を与えたと指摘するものもある。確かに、大津でロシア皇太子襲撃事件を起こした巡査の津田三蔵 (1855-91) は釈迦ヶ池の事件の2年後から三重県警に、その後は滋賀県警に勤務しており、不当な処分に対する関西の警察官たちの痛憤に

- (1) 小原淳「北海道に存するドイツ関連史跡の総合的検討―日独関係史の再検討に向けて」『WASEDA RILAS JOURNAL』8、2020年；同「東北地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』66、2021年；同「関東北部に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学高等研究所紀要』13、2021年；同「関東南部に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『西洋史論叢』42、2021年；同「東海地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『史観』185、2021年；同「北陸地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『WASEDA RILAS JOURNAL』9、2021年；同「東山地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』67、2022年掲載予定。各論文に共通する執筆方針については、「北海道」および「関東北部」を参照。
- (2) 「独逸国皇孫殿下大阪府下吹田村ニ遊猟ノ際巡査等不敬一件」『日本外交文書』第13巻 (明治13年/1880年)；内山正熊「吹田事件 (1880年) の史的回顧」『法学研究』51-5、1978年；山本俊一『日本コレラ史』東京大学出版会、1982年；百瀬響、谷中章浩「1879年の独逸皇族による北海道巡覧とアイヌ」『函館新聞』による報道を中心に『年報いわみざわ』27、2005年；山中敬一「1880年プロイセン皇孫ハインリヒ吹田遊猟事件」『関西大学法学論集』67-1、2017年；『明治初期の日本―ドイツ外交官アイゼンデッヒャー公使の写真帖より』；Rolf-Harald Wippich, Prinz Heinrichs Japan-Aufenthalt 1879/80 und der Jagd-zwischenfall von Suita. in: Thomas Beck/Horst Gründer/Horst Pietschmann/Roderich Ptak (Hg.), *Überseegeschichte. Beiträge der jüngeren Forschung*, Stuttgart 1999; Ernst Dietrich Mirbach, *Prinz Heinrich von Preussen: Eine Biographie des Kaiserbruders*, Köln/Weimar/Wien 2013.

ふれた可能性がある。また、大津事件の時の大審院長だった児島惟謙（1837-1908）が1883年から大阪控訴院長を務めていたことにも、津田の場合と同様の可能性を見いだせるかもしれない。しかし、二つの事件は11年あまりの年月を隔てている。釈迦ヶ池との繋がりを考えるべきはむしろ、当時の新聞報道も引き合いに出しているように<sup>(3)</sup>、前年に神奈川で起こったヘスペリア号事件である。

日本は1822年以来たびたびコレラ禍に見舞われており、1877年から各地で数度目の大流行が起きて、1879年には10万人を超える死者が出た。同年7月14日、政府は日本初の統一的な検疫規則「海港虎列刺病伝染病予防規則」を公布し、寄港する船舶の乗客の検診や停船措置に関する法制度を整備した。7月14日は「検疫記念日」とされる。この少し前、日本は「検疫停船仮規則」を定め、コレラが流行する神戸や大阪の港から東京湾に来航する船舶は神奈川県長浦港（現在の横須賀市）の検疫場に10日間停泊するよう義務づけることとして、7月3日に各国公使に通知したが、英仏独の同意を得られなかった。7月11日、清から来航して神戸に一時停泊していたドイツ船舶の「ヘスペリア号」が東京湾に進入しようとした。日本側は同船を長浦に回航させ、仮規則に従って検疫を受けるよう求めた。しかし翌日、駐日ドイツ公使アイゼンデッヒャー（Karl v. Eisendecker 1841-1934）は横浜から軍医を派遣して独自の検査を行い、異状なしと判断して、ヘスペリア号の即時解放を要求した。7月15日、砲艦に護衛されたヘスペリア号は横浜への入港を強行した。この事件は日本の世論を憤激させ、滞日中だったアメリカ合衆国前大統領グラント（Ulysses S. Grant 1822-85）もドイツの態度を非難した。外務卿の寺島宗則（1832-93）はドイツ側に強く抗議したが甲斐なく、この事件の2か月後に辞職した。日本がドイツと新たに日独通商航海条約を結び、不

平等条約を改正したのは1889年、さらに海港検疫権を獲得するのは1899年のことである。

明治14年の政変（1881）によって日本でドイツ流が風靡したと言われるが、その直前に日独は摩擦を抱えていた。釈迦ヶ池遊獵事件とヘスペリア号事件は、両国関係の複雑な推移をものがたっている。

## (2) 阿倍野のパウハウス<sup>(4)</sup>

大阪市内にはドイツに縁のある建造物が点在しており、有名なところでは、エンデ・ベックマン事務所の河合浩蔵（1856-1934）が設計した造幣博物館や新井ビル、ウィーンの芸術家フンデルトヴァッサー（Friedensreich Hundertwasser 1928-2000）がデザインした大阪市舞洲スラッジセンターなどがある。ここでは、阿倍野区にある大阪市立工芸高校の本館を取り上げる。

同校の前身である大阪市立工芸学校は、金属工芸科、木材工芸科、工芸図案科の3科を備えた5年制の学校として、1923年4月に開校した。当初は大正区の泉尾工業学校（現在の市立泉尾工業高校）を仮校舎としたが、大阪市営繕課が設計した校舎が翌年10月に完成して現在地に移転した。この新校舎のデザインの原型となったのは、ヴァン・デ・ヴェルデ（Henry van de Velde 1863-1957）が1906年に設計したヴァイマルの工芸学校（1911年）だとされる。第一次世界大戦後、この工芸学校がパウハウスに発展し、ヴァン・デ・ヴェルデの建てた校舎がヴァイマル校として使用されたのは周知のとおりである。

大阪市立工芸学校本館はヴァイマルの工芸学校と同様にL字形だが、素人目には、3階建てであることや建物の規模、縦長のガラス窓が多数並ぶ外観、屋根上の時計台の雰囲気から、工芸学校の向かいに建つ、同時期にやはりヴァン・デ・ヴェルデが設計した美術学校校舎とも似ているように見える。

(3) 例えば、『朝野新聞』1880年2月25日。

(4) 山脇巖『パウハウスの人々』彰国社、1954年；山脇道子『パウハウスと茶の湯』新潮社、1995年；寺尾和幸「水谷武彦が紹介したパウハウス」『日本美術研究』2、2002年；ジェフリー・E・ヘインズ/宮本憲一監訳『主体としての都市—関一と近代大阪の再構築』勁草書房、2007年；木下勇「〈都市計画と公共の福祉〉に関する〈子どもの参画〉と〈場所の感覚〉からの考察」『公共研究』4-1、2007年；常見美紀子「パウハウスラー大野玉枝に関する研究—一日展・光風会の活動と作品を中心に」『デザイン学研究』16-1、2008年；「山口正城と工芸学校展」プロジェクトチーム編『山口正城と工芸学校の教育—大阪のパウハウス』、2016年；大山勝男『「大大阪」時代を築いた男—評伝・関一（第7代目大阪市長）』公人の友社、2016年；深川雅文他編、原田明和訳『開校100年きたれ、パウハウス—造形教育の基礎』アートインプレッション、2019年；Henrike Thomsen, Wie Japan das Bauhaus für sich entdeckte, in: *Die Welt*, 4. Aug. 2000; Petra Ruick, Takehiko Mizutani's Years at the Bauhaus Dessau: Study on the Bauhaus and Takehiko Mizutani 1, 『日本建築学会計画系論文集』71-599、2006年。

大阪市立工芸学校では、山口正城（1903-59）、洋画家の赤松麟作（1878-1953）や小磯良平（1903-88）らが教えた。とくに凶案科教諭として1926年に赴任し、バウハウスの理論を教室に導入した山口の功績は大きく、山口の指導を受けた早川良雄（1917-2009）や山城隆一（1920-97）は戦後を代表するグラフィックデザイナーとなった。戦前に日本でバウハウスの教育を実践していたのは他には東京の新建築工芸学院だけであり、阿倍野の学校は日本のデザイン教育の最先端を走っていたと言えよう。なお、新建築工芸学院のほうは建築家の川喜田煉七郎（1902-75）が1932年に銀座に創設した教育機関で、バウハウスに留学した数少ない日本人である水谷武彦（1898-1969）や、山脇巖（1898-1987）と道子（1910-2000）夫妻が教壇に立った。

工芸学校が開校した頃の大阪は、1925年の第二次市域拡張によって日本最大の都市となり、「大大阪時代」の繁栄を謳歌していた。大阪の都市計画を主導した市長の關一（1873-1935）は、1898～1901年にベルギーとドイツに留学してワーグナー（Adolf Wagner 1835-1917）やシュモラー（Gustav v. Schmoller 1838-1917）に学んだ経験をもつ。また、この時期の大阪府の公園・緑地計画や都市計画を担当し、住之江公園、浜寺公園、枚岡公園、岸和田城址公園などの整備に貢献した大屋霊城（1890-1934）は、イギリスのハワード（Ebenezer Howard 1850-1928）の田園都市のみならずドイツのクラインガルテンにも着想を得て、1926年に「花苑都市」の建設を提唱し、甲子園や藤井寺、柏原、石橋、伊丹などに農園付き住宅地を造った。

阿倍野の工芸学校は、近代都市大阪の発展にドイツが及ぼした影響を探るうえでの重要な手がかりであろう。

### (3) 日露戦争とドイツ系ロシア人<sup>(5)</sup>

南海電鉄の泉大津駅から浜手に10分ほど歩いた市営墓地の一角に、ロシア兵の墓地がある。小振りな89の墓が7列に並び、その脇には、ロシアの国章である双頭の鷲を戴いた石造りの慰霊塔が立っ

ている。この墓地は日露戦争で捕虜となり、収容中に死亡したロシア兵のためのものである。当時、ここから4キロ離れた浜寺俘虜収容所には2万8000人の捕虜がいたが、これは周辺の高石村の人口の8倍にあたる規模であった。

あらためて墓地の慰霊塔を確認すると、円柱状の碑の半ばにロシア語で「死せるロシアの戦士たちへ / 旅順港の戦友より / 1905年」と彫り込まれているだけでなく、五稜の台座にロシア語、ドイツ語、ポーランド語、アラビア語、ヘブライ語で「魂よ、安らかなれ」と刻まれているのが分かる。日本にとって、ロシア帝国との戦争は「ドイツ人」や「ポーランド人」、ユダヤ教徒、イスラーム教徒との初めての戦争でもあった。

ロシアには多数の、そして多様なドイツ系住民が居住していた。その代表例は、18世紀前半の大北方戦争や世紀後半のポーランド分割によってロシアの版図に包摂されたバルト・ドイツ人だが、エカチェリーナ二世（Yekaterina II Alekseyevna 1729-96）が1762、63年に出した外国人入植誘致令によって、ヴォルガ地方、ヴォルギーニ、ベッサラビアなどへのドイツ人の入植が進み、さらにコーカサスやシベリアにもドイツ人が住み着いた。1897年の最初の全ロシア帝国勢政調査によればドイツ系ロシア人の数は177万人に及んだ。

とくに軍隊は彼らの活躍の場の一つであり、ロシア軍創設以来、参謀部や上級将校に占めるドイツ系の割合は15～20%を推移した。日露戦争に関与したドイツ系ロシア人としては、政治家・外交官では首相ウィッテ（Sergei Witte 1849-1915）、内相プレーヴェ（Vyacheslav Plehve 1846-1904）、外相ラムスドルフ（Vladimir Lamsdorf 1845-1907）、駐日ロシア公使ローゼン（Roman Rosen 1847-1921）、軍人ではバルチック艦隊司令長官エッセン（Nikolai v. Essen 1860-1915）と副司令官フェルカーザム Dmitri Fölkersam 1846-1905）、黒溝台会戦の将軍グリッペンベルク（Oskar Grippenberg 1838-1915）、旅順要塞司令官ステッセリ（Anatolij Stöbel 1848-1915）、旅順艦隊臨時司令長官ヴィトゲフト（Wilhelm

(5) スヴェン・サーラ、稲葉千晴編 / 辻英史訳『Der russisch-japanische Krieg 1904/05 im Spiegel deutscher Bilderbogen ヨーロッパから見た日露戦争—版画新聞、絵葉書、錦絵 日露戦争百周年記念展覧会』ドイツ・日本研究所、2005年；鈴木健夫『ロシアドイツ人—移動を強いられた苦難の歴史』亜紀書房、2021年；Gerd Stricker (Hg.), *Deutsche Geschichte im Osten Europas: Rußland*, Berlin 1997; Gert v. Pistohlkors (Hg.), *Deutsche Geschichte im Osten Europas: Baltische Länder*, Berlin 2002; György Dalos, übers. von Elsbeth Zylla, *Geschichte der Russlanddeutschen: Von Katharina der Großen bis zur Gegenwart*, München 2014.

Withöft 1847-1904)、ザバイカル・コサック軍を指揮したレンネンキャンプ (Paul v. Rennenkampf 1854-1918)、ウラジオストク巡洋艦隊長官イエッセン (Karl Jessen 1852-1918)、奉天海戦の司令官カウリバルス (Alexander v. Kaulbars 1844-1925)、バンゲルスキス (Rüdolfs Bangerskis 1878-1958)、東シベリア狙撃兵第四師団の指揮官フォーク (Alexander Fok 1843-1926)、旅順の海軍病院長を務めた探検家ブンゲ (Alexander v. Bunge 1851-1930)、さらにデニーキン (Anton Denikin 1872-1947)、ヴラーンゲリ (Pjotr Wrangel 1878-1928)、ウンゲルン (Roman F. v. Ungern-Sternberg 1886-1921) といった名が挙がる。また、戦争中に日本に多額の資金援助を行ったアメリカ銀行家シフ (Jacob H. Schiff 1847-1920) はフランクフルトのユダヤ人家族の出身である。

無論、彼らが「ドイツ人」としての意識を強固に保持し続け、常に共有し合っていたなどとは言えないが、時に自らのルーツとしてのドイツを強く再確認する、あるいはさせられる状況に直面したことは間違いない。その最たる例は第一次世界大戦であろう。大戦が始まると、ロシア帝国内の学校や教会ではドイツ語の使用が禁止され、ドイツ語新聞は廃刊に追い込まれ、また多くのドイツ系ロシア人がスパイやサボタージュの嫌疑で告発された。例えばヴォルギーニ県では、20万人のドイツ系住民の半分以上がシベリアへ追放され、県南部の国境地帯では50万人が強制移住させられた。また、軍の内部ではドイツ将兵の裏切りが噂され、彼らは戦線の部隊長から外されたり、配置転換された。さらに戦後も、背信的と見なされたドイツ人将校のリストが作成されて出版され、差別が続いた。

先述の日露戦争に従軍したドイツ系ロシア人たちのなかにも、その後に苦難の生涯を辿った者が少なくない。例えば、バルト・ドイツ人貴族だったレンネンキャンプは第一次世界大戦中は西部戦線第一軍の副官として東プロイセン侵攻に加わったが、タンネンベルクの戦いで無抵抗のまま撤退したため更迭さ

れ、世間の非難的となった。1917年の革命の際にポリシェヴィキに逮捕され、釈放後はアゾフ海のタガンロークでギリシャ人漁夫に身をやつして余生を送っていたが、ドイツ軍が同地に迫る1918年4月、赤軍によって虐殺された。他にも、ウンゲルンも赤軍に処刑され、ヴラーンゲリやデニーキン、カウリバルス、ローゼンは国を追われた。彼らのなかにはさらに、中国に亡命してロシア内戦を生き延びた後、ラトビア国防相や参謀総長を歴任し、第二次大戦中はドイツに協力してSSラトビア人義勇軍団総監となったバンゲルスキスのような人物もいる。バンゲルスキスはラトビア・ユダヤ人5万人の殺害に関与したとされるが、戦後もソ連軍に引き渡されることなく、1958年に西ドイツで没した。

しかし、多くのドイツ系ロシア人は第一次世界大戦後も内戦、追放、強制移住・労働、殺戮、餓死の恐怖にさらされ続けた。1921年のヴォルガ地方の飢饉だけでも30万人以上のドイツ系住民が死亡したと言われる。迫害はスターリン (Iosif V. Stalin 1878-1953) の時代にさらに苛烈さを増し、独裁者の死後も差別は続いた。現代にまで続くドイツ系ロシア人の苦難の歴史は、ここで語り尽くすにはあまりに大きすぎる。

#### (4) タカラヅカのヨーロッパ公演<sup>(6)</sup>

宝塚歌劇団の礎を築いた芸術家の一人に、ハプスブルク帝国出身の指揮者・作曲家ラスカ (Joseph Laska 1886-1964) がいる。リンツ出身のラスカは第一次世界大戦に従軍してロシアの捕虜となり、七年間の捕虜生活を経て、1923年8月にウラジオストクから来日した。まもなく宝塚音楽歌劇学校 (現在の宝塚音楽学校) の教授に迎えられ、宝塚少女歌劇団のオーケストラ団員たちをメンバーとする宝塚交響楽団を指揮し、神戸女学院でも教えた。ラスカはブルックナー (Anton Bruckner 1824-96) の作品を日本で初演した音楽家ともされる。1935年まで神戸に滞在したが、モスクワで開催された音楽大会

(6) 秦豊吉『宝塚と日劇—私のレビュー十年』という書房、1948年；秦豊吉『宝塚欧州公演日記抄』(秦豊吉『私の演劇資料』第4冊) 私家版、1953年；森彰英『行動する異端—秦豊吉と丸木砂土』TBSブリタニカ、1998年；徳永高志『戦前日本オーケストラの一運営—宝塚交響楽団を例に』『文化経済学』1-4、1999年；川崎賢子『宝塚—消費社会のスペクタクル』講談社、1999年；渡辺裕『日本文化モダン・ラブソディ』春秋社、2002年；岩淵達治『水晶の夜、タカラヅカ』青土社、2004年；朴祥美『〈近代日本〉を世界に見せる—戦時期対外文化政策と宝塚少女歌劇団の欧米公演』『思想』1026、2009年10月；根岸一美『ヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団』大阪大学出版会、2012年；衣笠弥生『演劇をめぐるファシズム期イタリアの文化政策—宝塚少女歌劇団の第一回欧州公演 (1938年) を通じて』『ディアファネース—芸術と思想』6、2019年。

から帰国しようとしたところ、突然に日本への再入国を禁じられ、やむなくウィーンに去った。

ラスカがいなくなってから3年後、宝塚少女歌劇団は日独伊親善芸術使節団として初めての海外公演を行った。この公演は歌劇団の創設者にして音楽歌劇学校校長でもあった大実業家、小林一三(1873-1957)がドイツ側に働きかけて実現したものだ。小林の三男の米三(1909-69)を団長に、組長の天津乙女(1905-80)、副組長の奈良美也子(1907-2000)以下の生徒30名を中心とする合計56名は、1938年10月2日、ドイツによるズデーテン併合の翌日に神戸を出港し、5ヶ月後の1939年3月4日に帰国した。これと同時期の8月16日~11月12日にはヒトラー・ユーゲントの来日イベントがあり<sup>(7)</sup>、また11月25日には日独間で「文化的協力ニ関スル日本国独逸国間協定」が締結されている。

現地でマネージャーとして八面六臂の活躍をした秦豊吉(1892-1956)は多才な人である。日本橋の生薬問屋に生まれ、叔父に七代目松本幸四郎(1870-1949)をもつ秦は、一高で山本有三(1887-1974)らと交わり、東京帝大法学部独逸法律科在学中に『若きエルテルの悲み』を翻訳して新潮社から出版している。卒業後、三菱商事に入社し、1920~26年にベルリンに駐在した。ベルリン時代にはシュニッツラー(Arthur Schnitzler 1862-1931)やハウプトマン(Gerhart Hauptmann 1862-1946)、オイケン(Rudolf Eucken 1846-1926)を訪ね、交流した。帰国後も勤めのかたわらでドイツ文学の翻訳を続け、レマルク(Erich M. Remarque 1898-1970)の『西部戦線異状なし』(1929)の他、ゲーテ(Johann Wolfgang v. Goethe 1749-1832)、シュニッツラー、シラー(Friedrich v. Schiller 1759-1805)、宮津を訪れて『さっさよやっさ』(1911)を書いたケラーマン(Bernhard Kellermann 1879-1951)などの作品を訳した。秦は「丸木砂土」の筆名で、艶笑文学も手がけている。1932年に東京宝塚劇場に抜擢され、日劇ダンシングチームを育成したり、東宝名人会を始めた。なお、日劇ダンシングチームはヒトラー・ユーゲント来日の際に、荻野幸久(?-1991)の演出、益田隆(1910-96)とオリガ・サフィア(Olga Sapphire 1907-1981)の振り付けで「ハイル・ヒトラー」

と題したショーを上演している。秦はその後、東宝映画、株式会社後楽園スタジアム(現在の東京ドーム)の取締役や社長を、戦後は帝劇社長などを歴任し、日本テレビ放送網の経営にも関与した。越路吹雪(1924-80)を育てたり、「額縁ショー」を考案したのも秦の功績である。

ヨーロッパ公演中の秦は、各地の劇場関係者や有力者と交渉して公演の契約を取りつけ、生徒たちの世話をし、ホテルや列車や食事の手配に奔走し、プログラムや解説を作成し、舞台裏で指示を出し、トラブルに対応し、しかし同時にヨーロッパのエンターテインメントの実情も観察しつつといった具合で、超人的な働きをみせた。秦を補佐したのが楽長の須藤五郎(1897-1988)で、須藤は戦後に関西労音の初代会長となり、共産党から参議院議員に選出されている。

公演旅行は最初から多難であった。当初はベルリン・シャルロテンブルクの州立オペラ座での公演を予定していたが、一足先に現地に入った秦が劇場に赴くと、話が通っていなかった。通俗的なレビューの類だと判断されたのが理由の一つであった。秦は駐独大使の大島浩(1886-1975)に泣きつくが、大島は非協力的で、再三の交渉の末、生徒たちがベルリンに到着した翌日の11月5日によやうく、フォルク劇場での公演にこぎつけた。しかも、11月20~23日のベルリン公演のうちの一回は、大島主催の冬季救援事業として無料で公演することとなった。

11月13日の『フェルキッシャー・ベオバハター』には「宝塚の少女たち」と題した紹介が掲載されているが、目を引くのはむしろ、「国外のドイツ人も法の庇護下にある！ライヒ、ユダヤの犯罪に対して賠償を請求」と題した一面の記事である<sup>(8)</sup>。この記事は、11月9~10日に発生したいわゆる「水晶の夜」に関するものである。11月10日の秦の日記には、「午前ベルリン市内商店打ち壊しの騒ぎあり。午後より邦君〔1937~45年にベルリンで活動していた舞踏家の邦正美(1908-2007)のこと〕のお世話にてファザーネン街の稽古場を借受け、「雪」の稽古を初む。同家向かい側のユダヤ教会放火せられ、終日燃えつつあり」とある。独文学者の岩淵達

(7) ヒトラー・ユーゲントの来日については、小原淳「東山地方」Ⅱ(6)を参照。

(8) *Völkischer Beobachter*, 1938.11.13.

治が当時を体験した生徒から聞いたところによれば、この稽古中に大きな音がして、向いの教会に火の手があがったという。

ソ連・ポーランド不可侵条約が更新された11月26日、一行はワルシャワへ向かった。1919～21年のポーランド・ソビエト戦争の際に日本によってシベリアから救出されたポーランド孤児たちが結成した「極東青年会」の支援で、急遽決まった巡演だった。11月28～30日にワルシャワで公演してからイタリアに移動し、12月3～16日にフィウメ（現在はクロアチアのリエカ）、ヴェネチア、ボローニャ、ジェノヴァ、トリノ、ミラノ、フィレンツェ、ローマ、ナポリを周った。15日の公演はムッソリーニ（Benito Mussolini 1883-1945）が観覧し、劇場は熱狂状態になったという。ヒトラー（Adolf Hitler 1889-1945）はおろかゲッベルス（Joseph Goebbels 1897-1945）すら劇場を訪れなかったドイツとは大きな違いであろう。

歌劇団はさらに、年をまたいで12月28日～1月26日にドルトムント、フライブルク、カールスルーエ、マンハイム、マインツ、ザールブリュッケン、カッセル、ライプツィヒ、ブレスラウ（現在はポーランドのヴロツワフ）、ドレスデン、デュッセルドルフ、ミュンスター、ケルン、ミュンヘンで34公演という強行軍をやり遂げた。この経験は大きな自信になったであろう。宝塚少女歌劇団は翌年4～7月にアメリカで二度目の海外公演を行っている。

最後に、ラスカのことを再びふれたい。不本意にオーストリアに帰国したラスカはウィーンで活動していたが、宝塚の訪欧の少し前の1938年9月、政治思想を疑われてゲシュタポの取り調べを受けた。その後も1939年と1941年に当局の尋問を受け、1942年12月についに投獄された。戦後も音楽活動を続け、愛国的な「オーストリア賛歌」（1946）や「オーストリアに寄せる歌」（1946）、「前線に立て、労働者たちよ 闘いの歌」（1948）や「我が身を護れ、労働者たちよ」といった歌曲、あるいは朝鮮戦

争を嘆いた「コリアの子供たち」や「朝鮮 Chosen」といった反戦的作品を残している。

##### (5) 播州人のみたヴァイマル・ドイツ<sup>(9)</sup>

姫路の市街を中心にして半径10キロ余りの円を地図に描いた時、その内側のさほど広くない領域に美濃部達吉（1873-1948）、三木清（1897-1945）、和辻哲郎（1889-1960）の生地が収まっていることに驚かされる。三人の知識人は別々の分野で活動したが、ドイツに留学して自身の学問を構築した点では共通している。ここでは、他の二人と別の時期に留学した美濃部は外し、1920年代のヴァイマル・ドイツで学んだ三木と和辻について述べたい。三木と和辻は近い時期にドイツにいただけでなく、滞独中にハイデガー（Martin Heidegger 1889-1976）の影響を受けたという知的関心のありようにおいても、通じるところがある。

三木清は兵庫県揖保郡平井村（現在のたつの市揖西町）の裕福な家庭に生まれた。同時期の同郷人に三木露風（1889-1964）や鹿島守之助（1896-1975）がいる。幼少期から学業に秀でており、龍野中学校（現在の県立龍野高校）で国語教師の薫陶を受けて読書に目覚める。一高を経て京大へ進み、西田幾多郎（1870-1945）や田邊元（1885-1962）に学ぶ。

大学卒業後の1922年、波多野精一（1877-1950）の推薦、岩波茂雄（1881-1946）の出資を受けてドイツに留学する。ドイツに着いた6月24日は、奇しくも外相ラーテナウ（Walther Rathenau 1867-1922年）が極右テロリストに暗殺された日であった。最初の一年はハイデルベルク大学でリッケルト（Heinrich Rickert 1863-1936）に学んだが、1923年5月にマールブルクに移り、ハイデガーに師事するようになる。翌年8月からパリで研究し、1925年10月に帰国した。留学中、日本人では石原謙（1882-1976）、阿部次郎（1883-1959）、天野貞祐（1884-1980）、北吟吉（1885-1961）、大内兵衛（1888-1980）、九鬼周造（1888-1941）、久留間鮫造（1893-1982）、

(9) 酒井三郎『昭和研究会—ある知識人集団の軌跡』TBSブリタニカ、1979年；三木清『三木清全集』第13、16、19巻、岩波書店、1968年、1985年；和辻哲郎『和辻哲郎全集』第25巻、岩波書店、1992年；竹内洋『革新幻想の戦後史』中央公論新社、2011年；マイルス・フレッチャー／竹内洋、井上義和訳『知識人とファシズム—近衛新体制と昭和研究会』柏書房、2011年；長山靖生『日本回帰と文化人—昭和戦前期の理想と悲劇』筑摩書房、2021年；原田昌博『政治的暴力の共和国—ワイマル時代における街頭・酒場とナチズム』名古屋大学出版会、2021年；Erich Ludendorff, *Vom Feldherrn zum Weltrevolutionär und Wegbereiter Deutscher Volksschöpfung. Meine Lebenserinnerungen von 1919 bis 1925*, München 1941；Dirk Schumann, *Politische Gewalt in der Weimarer Republik 1918-1933: Kampf um die Straße und Furcht vor dem Bürgerkrieg*, Essen 2001.

藤田敬三 (1894-1985)、黒正巖 (1895-1949)、羽仁五郎 (1901-83)、ドイツ人ではヘリゲル (Eugen Herrigel 1884-1955)、マンハイム (Karl Mannheim 1893-1947)、グロックナー (Hermann Glockner 1896-1979)、そしてハイデガーの助手だったレーヴィット (Karl Löwith 1897-1973) らと交歓した。

対して和辻哲郎は、兵庫県神崎郡砥堀村仁豊野 (現在の姫路市仁豊野) で、代々続く医者の一家に生まれた。姫路中学校 (現在の県立姫路西高校)、一高を経て、東京帝大へ進学し、谷崎潤一郎 (1886-1965)、芦田均 (1887-1959)、阿部次郎、安倍能成 (1883-1966)、そして夏目漱石 (1867-1916) と交わった。卒業後は東洋大学、法政大学で教え、1925年に京都帝国大学助教授になる。

1927年、38歳で洋行した和辻は妻に宛てて頻繁に手紙を送り、異国での暮らしぶりを事細かに伝えている。4月6日にベルリンに着いたが、言葉が分からず、また分かった限りではあまり感心もできない大学での聴講はすぐにやめてしまう。真面目に授業に出て、ドイツ語でゼミの発表や討議を行い、ドイツ人の学者と積極的に交流し、新聞に論文まで寄稿した三木と異なり、和辻はむしろ読書や博物館見学、史跡めぐり、音楽鑑賞、観劇、散歩、日本人同士の交流に時間を費やした。このベルリン滞在中、和辻は出版されたばかりのハイデガーの『存在と時間』(1927)を読んでおり、その影響と留学中の見聞は代表作『風土』(1935)に結実する。結局、和辻は3年間の留学の予定を半分に縮め、イタリア、フランス、イギリスを周って早期帰国した。

留学中の過ごし方は対照的にも思える二人だが、ともにヴァイマルの騒乱を目の当たりにし、知人や家族に送った手紙に自らの体験を綴っている。まず三木の場合、全集に収録された書簡は1923年11月24日より前が薄く、とくに11月8~9日のミュンヘン一揆についての情報が得られないのが惜しい。しかし、それ以前から三木がドイツの政治情勢の変化を感じ取っていたことは確認できる。例えば来独から三ヶ月たった1922年9月20日付の石原謙 (1882-1976) に宛てた手紙には、「こちらの状態は悪くなるばかりです。今日もハイデルベルヒでは一般のストライキがあつて軍隊がでたりしました。夜も何処のレストーランも閉つてしまつて食事も出来ず、閉口しました。在留の日本人も著しく減つてゆくやうです」とある。11月24日付の田邊元

宛ての手紙には、「独逸はなかなか恢復しさうにもありません。衰へてゆく民族を黙つて眺めてみなければならぬのも悲しいことです」と記している。ルール占領とハイパー・インフレーションが続き、各地で騒擾が繰り返され、数日前にライヒ銀行総裁ハーフェンシュタイン (Rudolf Havenstein 1857-1923) が急死し、前日にシュトレゼマン内閣が辞任した状況を踏まえれば、三木のペシミズムは決して大袈裟とは思えない。

1924年1月6日付の田邊宛の手紙は、「独逸は今不思議な小康の状態にあります。いつまた騒ぎ始めるのか分かりませんが、とにかく今は落附いてみます」と書いている。しかしマールブルクに移った5月になると、ドイツの情勢と三木の心情にまた変化が現れる。日本ホーリネス教会の牧師であった森五郎 (1887-1961) に送った5月31日付の手紙には、以下のような一節がある。「この間からマールブルヒでは“Deutsche Tage”があつた。これはルーデンドルフ一味の帝国主義的、軍国主義的運動である。先達てはハレでめつぼうな宣伝をやつた連中だ。この運動がこの町では人気を喚び起し、宿の主婦までが感激して毎日この話をするので、私はひどく不機嫌になつてゐる」。

文中の「Deutsche Tage」(ドイツの日)とは、民族至上主義的な文筆家バルテルス (Adolf Bartels 1862-1945) の提唱で1913年に始まった極右派の祭典のことである。ヴァイマル期になるとドイツ民族防衛同盟が主催者となり、鉄兜団 (シュタールヘルム) やナチ党も参加して規模が拡大し、1920年にヴァイマル、1921年にデトモルト、1922年にコーブルク、1923年にニュルンベルクとバイロイト、1924年にハレ、マールブルク、ジーゲン、ヴァイマル、ミュンスター、ブルッフザールと、毎年開催されるようになった。三木が語っている1924年5月1日ハレの「ドイツの日」では、ルーデンドルフ (Erich Ludendorff 1865-1937)、マッケンゼン (August v. Mackensen 1849-1945)、シェア (Reinhard Scheer 1863-1928)、 Luckner (Felix v. Luckner 1881-1966) といった英雄的軍人、そしてヴィルヘルム二世 (Wilhelm II. 1859-1941) の五男オスカー (Oskar v. Preußen 1888-1958) が参列し、モルトケ像が建立されたが、共産主義者との銃撃戦が起り、死者が出て467人が逮捕された。

三木が直接に見聞したマールブルクの集会は、

ルーデンドルフも参加して5月25～30日に開催された。マールブルクでは同月4日の国会選挙で、ナチ党が他の極右政党と合同で結成した「フェルキッシュ・ブロック」が17.7%の票を獲得しているが、この数字は全国平均の6.6%を大きく上回っている。

三木の文章に切迫した響きがあるのに対して、和辻のほうはどこか傍観的である<sup>10)</sup>。留学先のベルリンに着いて一ヶ月後の1927年5月7日、和辻は、鉄兜団がベルリンで7万人規模でデモ行進をするという噂を耳にする。警察が市中で警戒に努めており、「宿のばあさん」からも外出を控えるよう言われるが、和辻は「今日のひるまは大変穏やか」、「何か起こるとすれば今晚か明日の日曜」だろうと考えて、午前中は大学で事務手続きや聴講を済ませ、3時まで友人と昼食をとりつつ歓談し、夕方は語学のレッスンに通った。その日の夜に書いた手紙は、「二、三日前に右傾派の一団が演説会で大分人をなぐつて、その団体（国民社会党）は解散を命ぜられた。どうも右傾派が中々荒つばい事をやつてゐる。さうして人気もある。今日と明日は鉄かぶとに同情を有する人は黒白赤の三色旗（昔の、帝政時代のドイツの国旗か）を出してもらいたいという宣伝があつたが、今日町を歩いていると、中々方々にこの旗が出てゐた」というものである。「二、三日前」の「荒つばい事」とは、ナチ党が5月4日の集会で反対派の牧師に暴力をふるったために一時的な活動禁止になった事件を指すと思われるが、この手紙は「右傾派」の中身を区別していない。

「何か起こる」と予想した翌日も、和辻は友人と3人でポツダムに散歩に行き、「ポツダムでもスタールヘルム〔鉄兜団〕の行列を二つほど見たが、なかなか整然として立派なものだつた。これでは右傾派の運動も中々馬鹿に出来ぬと思つた」と、妙に感心している。3月19日に市内のリヒターフェルデ・オスト駅でナチ党と共産党の大規模な衝突が発生し、いよいよ街頭の政治暴力が激化し始めつつあったベルリンにしながら、和辻の観察に緊迫感はない。

6月6日に書かれた手紙は、前日にベルリン市内で共産党の2万人規模のデモ行進があったことを伝えている。和辻は日本人仲間8人と野次馬をする

つもりだったが、仲間の提案で予定を急遽変更し、郊外のグリュエネヴァルトを散歩することにした。結局、日本人会で夕食を済ませた9時ごろに、行列の一部に出くわした程度であったという。数日後の6月10日付の手紙は、5月に行われた鉄兜団の行進を写した絵葉書を同封し、自分の住む屋敷町で家々から掲げられるのは帝国旗ばかりで、共産党の示威行動の際も赤旗は見なかったと書いている。

10月3日の手紙は、前日のヒンデンプルク80歳誕生日の祝賀会の模様にもふれている。方々の家の窓に帝国旗が掲げられ、ヴァイマル共和国の旗を出しているのは一割ほどだった。和辻はヒンデンプルクの姿を一目見ようと、ブランデンプルク門のあたりで群衆に混ざって1時間半待った。しかし、ヒンデンプルクの乗った自動車が門柱の間にちらっと見えたとたん、前に立っていた青年が帽子をもった手を高く挙げて万歳したため、何も見えなかった。周囲の人も同様で、皆で笑いあったという。「ヒンデンプルクは大戦争の大立者といふばかりでなく、人物が立派なのだ」と云ふ。多分さうなのだろう。しかしとにか社会主義的な革命までやつて来た国で、まるで日本の天子様のやうに大統領が尊敬されているといふ事は、いかにもドイツ人の気風をよく現してゐる。つまりかういふ点では昔のカイザーの時分と一向変わつてないのだらう」というのが、和辻の感想である。妻子に宛てた私信ということも勘案しても、和辻の呑気さは三木と対照的であり、旧稿で扱ったミュンヘン一揆の時の斎藤茂吉（1882-1953）と石原莞爾（1889-1949）の差を思い起こさせる<sup>11)</sup>。

既に予定していた紙幅を超過しているため、その後の二人についてはアウトラインをなぞるにとどめる。三木は1925年に帰国し、希望していた京大への就職がうまくいかず、1927年に法政大学教授に就任、1930年5月、共産党シンパ事件で逮捕された。11月に出獄してからは教職を辞め、文筆生活に専念するようになる。1933年5月17～19日の『報知新聞』に掲載した「ナチスの文化弾圧」でナチの焚書を非難し、レッシング（Gotthold E. Lessing 1729-81）以来のドイツ文学の寛容の精神の伝統、ドイツ文化に対する外国文化の影響、ユダヤ人の文化的貢献を説いた。7月に長谷川如是閑

10) 以下は、『和辻哲郎全集』所収の1927年5月11日付の妻宛ての手紙を参照。

11) 小原淳「東北」Ⅱ(7)を参照。

(1875-1969)、徳田秋聲(1872-1943)、秋田雨雀(1883-1962)らと学芸自由同盟を発足して反ナチ的な態度をより明確にするとともに、この頃から時評を多く書くようになる。

1937年11月に『中央公論』に書いた「日本の現実」において「日本の思想的現実」と「日支親善」を論じたのが、近衛文麿(1891-1945年)のブレントラストである昭和研究会の目に留まり、1938年8月に同会に迎えられ、さらに文化部門の委員長として、第一近衛内閣の対中交渉に助言するようになった。しかし三木の「東亜共同体論」は換骨奪胎されて大東亜共栄圏の理論に転用され、昭和研究会も1940年11月に解散した。

1938年6月以来『文学界』などに書いたエッセーをまとめて1941年8月に出版した『人生論ノート』がロングセラーとなる。しかし、1942年1月に『中央公論』に発表した論文「戦時認識の基調」が軍部の批判を受け、その後の三木は言論活動を制限された。同月、軍に徴用されて、陸軍宣伝班員として12月までマニラで勤務することとなる。1945年3月、治安維持法の容疑者を匿い逃亡を助けた嫌疑で警視庁に検挙され、9月26日、豊多摩拘置所で悲惨な獄死を遂げた。竹内洋が推測するように、三木が生き延びていれば、戦後知識人の配置図は変わっていたかもしれない。

他方、和辻は1931年に京大教授に昇任、翌年に博士号を授与され、1934年に東京帝大文学部に転任した。翌年に出版された『風土』は代表作となる。戦後は1946年1月に『世界』の創刊に関与し、また『思想』や『展望』に発表した「人倫の世界史的反省 序説」、「歴史的自覚の問題」、「世界的視圏の成立過程」などの論考をもとに、東大退職後の1951年に『鎖国』を発表した。同書で読売文学賞、2年後の『日本倫理思想史』で毎日出版文化賞を受賞している。戦前戦後をつうじて宮中での進講も行

い、正田美智子(1934-)にも講義した。一族には多くの学者・文化人がいる。留学後の人生もまた、和辻と三木とでは大きく異なって見える。

#### (6) ドイツ皇帝に謁見した音響学者<sup>12)</sup>

ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世に拝謁してパイプオルガンの演奏を披露した田中正平(1862-1945)は、淡路国三原郡八幡村(現在の兵庫県南あわじ市)に生まれた。幼少時から人形浄瑠璃を好み、虫の音を聞くのを楽しんだという。1878年に東京大学に入学、田中館愛橘(1856-1952)や藤澤利喜太郎(1861-1933)とともに、理学部物理学科でメンデンホール(Thomas Mendenhall 1841-1924)に学んだ<sup>13)</sup>。物理学者のメンデンホールは夫婦ともに音楽を愛好しており、毎週土曜日の晩に学生を家に招いてヴァイオリンやピアノの演奏を披露し、歌唱や音楽理論を教えてくれた。後年の回想によれば、田中はこの頃から、日本の音楽と西洋の音楽の違いはハーモニーの有無にある、日本音楽はハーモニーがないために貧弱である、日本音楽の「これから先の進歩は矢張りハーモニーを使用する点に進んで行くだろう」と考えるようになったという。

卒業後の1883年から同校の助教授及び予備門教諭になり、1884年から3年間の予定でドイツに留学する。8月24日に横浜を出港した船には、飯盛挺造(1851-1916)、穂積八束(1860-1912)、長興稱吉(1866-1910)、宮崎道三郎(1855-1928)、片山国嘉(1855-1931)、隈川宗雄(1858-1918)、丹波敬三(1854-1927)、萩原三圭(1840-94)、森鷗外(1862-1922)が同船しており、鷗外が詠んだ「日東十客歌」が洋行の様子をユーモラスに描き出している。

ベルリン大学に入学した田中はヘルムホルツ(Hermann v. Helmholtz 1821-94)に師事して音響学と磁気学を学び、他からも和声学や音楽形式論、対

12) 田中正平「純正調発案の動機」『日本音響学会誌』2、1940年；田中正平『日本和声の基礎』創元社、1940年；伊藤完夫『田中正平と純正調』音楽之友社、1968年；平塚知子「〈発達〉する日本音楽—田中正平の理想と実践をめぐって」『比較文学研究』71、1998年；西原稔「田中正平の〈日本和声〉の理論と〈日本的なもの〉の思想（『転換期の音楽』編集委員会編、『転換期の音楽—新世紀の音楽学フォーラム・角倉一郎先生古稀記念論文集』音楽之友社、2002年）；平田公子「明治30年代後半の音楽論にみる日本音楽観—田中正平の日本音楽観とその評価を通して」『福島大学教育学部論集・人文科学部門』75、2003年；泉健「田中正平における西洋音楽の受容」『和歌山大学教育学部紀要・人文科学』61、2011年；酒井健太郎「クラウス・プリングスハイムの日本での音楽活動について—昭和音楽大学オペラ研究所〈オペラ情報センター〉を利用して」『昭和音楽大学研究紀要』36、2017年；篠原盛慶「田中正平の日本製の〈純正調〉オルガン—〈廣義の純正調〉の具現化」『音楽学』65-2、2020年；Shohé Tanaka, Studien im Gebiete der reinen Stimmung, in: *Vierteljahrsschrift für Musikwissenschaft*, Nr. 6-1, 1890;

13) 藤澤については、小原淳「北陸」II(2)を参照。

位法を学んだ。また、それまで楽器をほとんど演奏したことがなかった田中はシュテルン音楽院（現在のベルリン芸術大学）でヴァイオリンやピアノを習ってオーケストラに参加したり、大学の合唱部にも入部し、コンサートにも足しげく通った。

しかし、ベルリンでの田中の一番の課題は純正律の研究であった。純正律は、周波数が単純な整数比である純正音程から成る音律であり、倍音のうねりを伴わない、美しい響きの和音を得られる。しかし、転調や移調をすると音が濁ってしまうため、近代西洋音楽においては1オクターブを12等分した平均律を用いるのが一般的である。先述のとおり、田中は、日本の音楽はモノフォニーからポリフォニーへと「進歩」していくと予測していた。そして、西洋音楽が単旋律のグレゴリオ聖歌から始まってロマン派のハーモニーへと発展したように、この進歩を人類の普遍的な現象だと考えた。しかし他方で彼は、学生時代にメンデンホールから聞かされた、西洋音楽こそが自然法則に基づく完全な音楽であるという言葉分には承服しかねた。田中は平均律を用いた西洋音楽とは異なる、日本独自のハーモニーの確立を模索するようになる。

本人の後年の回想によれば、そうした時にヘルムホルツに、「将来日本の国民が進んで行く時に於ては何れハーモニーは要求されるだらう。さう致しました時にどう云ふハーモニーの土台を作ったら宜いでせうか」と聞いたところ、「それは無論純正調に行くより仕様が無い。西洋の音楽には平均律と云ふのに瀟漫して居るが、夫には一種の歴史的経路があり歴史的の習慣性を帯びて斯うなつた。新しく和声始めるのに何を苦しんで平均律を使ふか」と、「激烈なる御奨励」を与えられた。かくして、田中は西洋の平均律に対する日本の純正律を追究し続けることとなった。

田中は1890年に論文「純正調の研究」を『音楽学季刊誌』に発表、ベルリン大学から哲学博士の学位を授与された。さらにこの年、純正調のリード・オルガンを製作、ベルリン・フィルの指揮者ビューロー（Hans v. Bülow 1830-94）によって「エンハルモニウム」と名付けられたこの楽器を各地で実演し

た。ブルックナーもウィーンで田中の実演を聞き、興味を示したという。田中のエンハルモニウムの話題はヴィルヘルム二世の耳に届き、皇帝の要望を受けた田中はヴァルカー社と共同で大型の純正調パイプオルガンを製作した。1893年にベルリンのドロテンシュタット通りにあったギムナジウムに自作のパイプオルガンを設置し、9月に皇帝の御前で演奏した。

1899年4月、田中は14年半ぶりに帰国する。しかし日本の音楽界に地位を得られず、ドイツから持ち帰ったエンハルモニウムも母校の物理学研究室に保管されたままとなった。その後の田中は技術者としての道を進み、日本鉄道会社や帝国鉄道庁（後に鉄道省）に勤務、1929年まで務めた。1901年には最初の国産ガスマントル（白熱ガス灯）の特許を申請している。

しかし、1908年に月島に自宅を建てて邦楽研究の場とし、邦楽の五線譜化に取り組んだり、邦楽の鑑賞や普及を目的とする「美音会」、「美音倶楽部」を組織して邦楽の振興に尽力するなど、田中は日本固有の音楽についての探究を放棄しなかった。そして1930年、東京帝大に預けていたエンハルモニウムを修理して、純正律の研究を再開する。日本楽器製造株式会社に依頼してエンハルモニウムを改良したオルガンを製作、1932～38年に5台のオルガンが完成、さらに浜松楽器工業株式会社が1942年に1台を製造した。田中は1932年に社団法人東京音楽協会理事長、1941年に文部省国民精神文化研究所（後に教学錬成所）の嘱託となり、1940年には自身の和声理論をまとめた『日本和声の基礎』を執筆している。1945年、疎開先の千葉県で死去した。

日本的ハーモニーの可能性を模索した田中は、しかし西洋人が日本風の音楽を作ることには懐疑的であった。例えば、東京音楽学校のドイツ人教師ユンケル（August Junker 1868/70-1944）が作曲して1912年に帝国劇場で初演された「熊野」や、時代を下って1940年に初演されたプリングスハイム（Klaus Pringsheim 1883-1972）の「管弦楽のための協奏曲」などの日本風な旋律と和声を、田中は肯定しなかった<sup>14)</sup>。

14) プリングスハイムはシュレーゲンのユダヤ人商人の家の出身で、一族から音楽家、学者が多数輩出した。双子の妹のカタリーナ（Katharina “Katia” H. Mann-Pringsheim 1883-1980）はトーマス・マン（Thomas Mann 1875-1955）と結婚しており、また母方の祖父は風刺雑誌『クラダラダッチュ』の編集長だったドーム（Ernst Dohm 1819-83）である。

この点に関連して気になるのは、田中が「君が代」の音楽性をどのように評価していたのかという問題である。「君が代」は、1880年に宮内省雅楽課が作成した旋律に、プロイセンの軍楽家エッケルト（Franz Eckert 1852-1916）が和声をつけて現在のカタチとなった。なお、エッケルトは「大韓帝国愛国歌」の作曲者でもある。この、西洋人の手を経た日本風の楽曲に対する田中の議論の検討は、今後の課題としたい。

#### (7) 加藤弘之の独逸学事始<sup>15)</sup>

東京大学初代総理・帝国大学第二代総長、独逸学協会学校長、帝国学士院長、貴族院議員、枢密顧問官などを歴任し、政治、学問、教育の各分野に足跡を刻んだ加藤弘之（1836-1916）は、近代日本のドイツ学のパイオニアの一人でもある。自伝によれば、加藤は恵まれぬ幼少時代を送った。天保の大飢饉と藩の減俸が重なった不幸な時期に出石藩士の子として生まれ、腕力も弱く、友人も少なかったという。14歳の時に母と死別し、1852年、江戸詰めとなった父親に従って出府し、父とともに佐久間象山（1811-64）に西洋式の兵学を学ぶ。象山は加藤に目をかけてくれたが、一年もしないうちに失脚してしまった。次いで大木忠益（坪井為春、1824-86）に学ぶが、今度は父が急死する。家督を継いだ加藤は、家族の反対を押して江戸に戻り、衣食に事欠く貧乏暮らしをしながら勉学を続けた。

1860年、師の周旋で蕃書調所教授手伝となる。職を得て暮らしぶりが多少良くなっただけでなく、箕作阮甫（1799-1863）、川本幸民（1810-71）、杉田玄端（1818-89）、木村軍太郎（1827-62）、市川兼恭（1818-99）、寺島宗則、坪井信良（1823-1904）、津田真道（1829-1903）、西周（1829-97）、杉亨二（1828-1917）といった碩学と机を並べる機会を得て、加藤の人生は上向きになった。

加藤の蕃書調所への入所の翌年、日本とプロイセンのあいだで日普修好通商条約が結ばれた。条約の締結当初、プロイセン側から日本へ送られる書簡にはオランダ語訳または和訳が添えられていたが、そ

の後、ドイツ文のみとなったため、幕府はドイツ語を解する人員を育成しなくならなくなった。加藤は市川兼恭とともにドイツ語を学び、1862年に市川と協力して『官版独逸単語編』を編纂した。これは日本人による最初のドイツ語単語集であり、日本におけるドイツ学に先鞭をつける仕事であった。この年、加藤は市川の妻の姪と結婚した。

1864年、加藤は出石藩を離れて幕臣となり、大目付として明治維新を迎えた。すぐに新政府から政体律令取調御用掛を拜命する。西洋の事情に通じていることが、異例の早さでの登用の理由だったと思われる。1869年、大学大丞となり、大学南校の長を務めることとなる。さらに1870～74年には、毎週2、3回、スイスの法学者ブルンチュリ（Johann Caspar Bluntschli 1808-81）などをテキストにして明治天皇に進講した。1875年に元老院議員、1877年に東京開成学校総理に就任する

蕃書調所への入所以来の十数年間、加藤はただドイツ語を習得するだけでなく、政治学や道徳、哲学に関する書物を読んで、自らの学問の幅を広げた。この点は、ドイツ語の力では加藤を凌ぎながら、もっぱら語学や電信技術、印刷技術の習熟に才能を費やして、出世街道を辿らなかった市川との分岐点だったかもしれない。

いち早くヨーロッパの言語や思想にふれた加藤は、既に幕末から、西洋の立憲政体が東洋の専制よりも優れていると考えるようになっていた。桜田門外の変以降の政治変動のなかで二十代半ばに書いた最初の著書『隣艸』（1861）は、「大律」と「公会」、つまり憲法と議会を設けて君主の権力を抑制する、「上下分権の政体」を理想としている。同書は表面的には隣国の清について論じたように装っているが、実際には日本のあるべき政体を論じた書である。これは同僚の津田や西の助言を容れての細工であった。加藤の著述活動はその後、『隣艸』を補完する『立憲政体略』（1868）や、立憲政の施政を論じた『真政大意』（1870）の執筆、さらにブルンチュリの『国体汎論』の訳出（1872～74）を挟んで、フリードリヒ二世（Friedrich II. 1712-86）を引き合

15) 加藤弘之先生八十歳祝賀会編・出版『加藤弘之自叙伝—附金婚式記事概略・追遠碑建設始末』、1915年；上田勝美、福嶋寛隆、吉田曠二編『加藤弘之文書』3、同朋舎出版、1990年；区建英「〈隣艸〉と〈西洋事情〉—西洋理解の思考様式の角度から」『北大法学論集』41-1、1990年；堅田剛『独逸法学の受容過程—加藤弘之・穂積陳重・牧野英一』御茶の水書房、2010年；田中友香理『〈優勝劣敗〉と明治国家—加藤弘之の社会進化論』ペリかん社、2019年；田畑忍『加藤弘之』吉川弘文館、2020年；Andreas Neemann, *Landtag und Politik in der Reaktionszeit: Sachsen 1849/50-1866*, Düsseldorf 2000.

いに出しつつ「天皇も人なり」と言い切り、あらためて立憲君主政の妥当性を主張した1874年の『国体新論』の発表へと続いた。この間の1873年、加藤は明六社の結成に加わり、また訳業のほうでは、フランクフルト国民議会の五十人委員を経験し、後にザクセンの国民自由党のリーダーとなったビーダーマン (Karl Biedermann 1812-1901) の『各国立憲政体起立史』(1875)、政治的なトゥルネン運動に参加したためにアメリカへの亡命を余儀なくされたリーバー (Franz Lieber 1798/1800-72) の『自由自治』(1876) を出版している。

しかし、旧東京大学初代総理になった1881年前後から、加藤の思想に変化が表れる。この年、彼は旧著を自ら絶版にする。『国体新論』への批判、政府からの圧力がその直接の理由だが、しかし本人の弁によれば、自分自身がその少し前から、進化論を知ったことかつての持論から離れていたという。1882年に発表した『人権新説』で、加藤はイギリスやドイツの研究に依拠しつつ社会進化論を展開し、天賦人権説の「妄想」を強く否定した。この頃、加藤が総理を務める東京大学でモース (Edward S. Morse 1838-1925) やフェノロサ (Ernest Fenollosa 1853-1908) によって社会進化論が紹介され、「優勝劣敗」の理論が日本に拡大しつつあった。短期間に三版を重ねた加藤の『人権新説』もまた、この流れを補強するものだった。

ただし、田中友香里によれば、加藤は社会進化論に傾倒してかつての立憲政体論から「転向」したわけではなく、むしろ、立憲政体が樹立される過程を進化論によって明確化しようとしたのだという。国権と民権、保守と進歩という二分論にあてはめれば、確かに加藤は転向者、変節漢のごとく見える。しかし、ドイツを代表する進化論者ヘッケルの思想が人種主義者と社会主義者、さらには青年運動や生改革運動の参加者にもよく読まれたように、ドイツにおいても日本においても、進化論は相対する両陣営の双方に大きな影響を与えた。『人権新説』で引用されているドイツ人学者たちを例にとっても、自由思想家党に属し、リープクネヒト (Wilhelm Liebknecht 1826-1900) とも協力関係があったビューヒナー (Ludwig Büchner 1824-99)、学生時代に1849年バーデン蜂起を支持して退学処分を受

け、後年にはビスマルク (Otto von Bismarck 1815-98) の社会保障制度の実現に尽力したシェフレ (Albert Schäffle 1831-1903)、独自の中欧国家連合構想を掲げてビスマルクを批判した一方で反ユダヤ主義者でもあったフランツ (Constantin Frantz 1817-91)、1848/49年革命期のリーダーで大ドイツ主義であったが後にプロイセン支持に移ったフレーベル (Julius Fröbel 1805-93)、そして全ドイツ連盟の創始者に名を連ねるヘッケル (Ernst Haeckel 1834-1919) というように、その政治的立場は多様で流動的である。日本においても、『人権新説』と同時期に民権派の松島剛 (1854-1940) がスペンサー (Herbert Spencer 1820-1903) の著書を訳し『社会平権論』(1881~84) として出版するなど、やはり社会進化論は思想の左右を問わず、浸透しつつあった。

1893年、加藤は帝国大学総長を辞職した八ヶ月後にヘルヴァルト (Friedrich v. Hellwald 1842-92) の著作に感化されて『強者の権利の競争』を執筆し、翌年にそのドイツ語版をベルリンのR・フリードレンダー・ウント・ゾーン社から出版した。当時としては異例の、日本人によるドイツでの出版に対しては、『ベルリナー・ターゲブラット』、『ケルニッシェ・ツァイトゥング』、『ディー・ポスト』、『アルゲマイネ・ツァイトゥング』といったドイツ語圏の各紙、あるいはフランスの『ル・タン』が書評を寄せた。例えば、オーストリアの社会学者ラッツェンホーファー (Gustav Ratzenhofer 1842-1904) の著作と併せて加藤の著作を紹介した『グレンツボートン』誌の書評は、加藤のことを「ドイツの学問を吸収しているが、生粋のドイツ人につきものの偏見や執着、思い入れ、配慮を知らない日本人」であるがゆえに、「極めて論理一貫したドイツ人」と評する<sup>16)</sup>。そして、ドイツ人が書いたもの以上にドイツ的な加藤の著作は、「東アジアが本当に我々の文化圏 Kulturkreis に入場したこと、今後は政治や国民経済の面で彼らを考慮に入れなければならないことを新たに証明した」としている。各紙が加藤の思想の独自性を認めたわけでは決してないが、先達のいない道を独力で進んだドイツ学の徒であった加藤からすれば、自らの意見をドイツ語で示してドイツに向けて発し、一定の反響を得たことは、ドイツ学の

<sup>16)</sup> *Die Grenzboten*, 53-3, 1894, S. 585-595.

免許皆伝の証と言えるかもしれない。1907年、加藤は功績を認められ、ヴィルヘルム二世からプロイセン王冠第一等勲章を授与された。

加藤は11人の子供をもうけ、息子の照麿(1863-1925)、次男の晴比古(1870-1944)、女婿の榊保三郎(1870-1929)や山縣伊三郎(1858-1927)はドイツ留学を経験した。孫には音楽評論家の京極高鋭(1900-74)、小説家の濱尾四郎(1896-1935)、古川ロッパ(1903-61)がおり、彼らの活動範囲はドイツからはるかに逸脱している。

### Ⅲ. おわりに

西日本における政治・文化・経済の中心地であり、居留地のような国際社会との接点を有していた大阪や神戸は、日独の活発な交歓の場であった。大阪工芸学校や花苑都市、宝塚、あるいは神戸の異人館など、いわゆる阪神間モダニズムの展開にドイツが与えた影響も確認できるし、三木清、和辻哲郎、美濃部達吉、田中正平、加藤弘之といった人びとのドイ

ツ体験についてもさらなる議論の余地がある。また、本稿ではふれられなかったが、お雇い外国人リッター(Georg Hermann Ritter 1828-74)が所属した舎密局や、川口居留地のレーマン・ハルトマン商会なども、大阪・兵庫に残る関連史跡・史実として興味深い。

しかし、もう一つ忘れてならないのは、Ⅱ(3)で論じた日露戦争の捕虜や、兵庫県加西市青野原にあった第一次世界大戦時のドイツ人捕虜収容所、あるいは吹田の釈迦ヶ池遊猟事件のように、この地域の史跡・史実のなかにも、日独関係の摩擦や亀裂の側面をものがたるケースが複数存在していることである。これらの事例は、日独関係史を親善や町おこしの材料として表層的に消費するのではなく、複雑な国際交流の歴史を捉え直す手がかりとして客観的に検討することの必要を再確認させてくれる。

本稿は、2018～22年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「1848～1871年のドイツ系革命家たちの活動とネットワークに関する研究」(課題番号18K01050)の成果の一部である。

#### ・大阪府と兵庫県に存する日独関係の史跡一覧

史跡名	住所	備考
吉志部神社	大阪府吹田市岸部北 4-18-1	Ⅱ(1)に関連。
川口居留地跡	大阪府大阪市西区川口 1-5 本田小学校北西角	Ⅱ(1)に関連。ハイトケンパーの他、レーマン・ハルトマン商会などが活動。
横浜市長浜ホール	神奈川県横浜市金沢区長浜 114-4	Ⅱ(1)に関連。1879年に神奈川県長浦港(現横須賀市)に設けられた横浜検疫場の事務所を改築。隣接の旧細菌検査室に野口英世(1876-1928)が勤務。近隣に旧長濱検疫所一号停留所(検疫資料館)。
「此附近露国皇太子遭難之地」碑	滋賀県大津市京町 2-2-14	Ⅱ(1)に関連。
児島惟謙銅像	愛媛県宇和島市丸之内 3-6 宇和島城上り立ち門前	Ⅱ(1)に関連。近隣に生誕地。
大審院児島惟謙苦学之地	愛媛県西予市野村町野村 12-334	Ⅱ(1)に関連。
大阪市立工芸高等学校	大阪府大阪市阿倍野区文の里 1-7-2	Ⅱ(2)に関連。
大阪市舞洲スラッジセンター	大阪府大阪市此花区北港白津 2-2-7	Ⅱ(2)に関連。
造幣博物館	大阪府大阪市北区天満 1-1-79	Ⅱ(2)に関連。河合の建築は他に新井ビル(旧報徳銀行大阪支店)(大阪市中央区今橋 2-1-1)。神戸市内に神戸地方裁判所(中央区橋通 2-2-1)、旧小寺家厩舎(重文)(中央区中山手通 5-3-1 相楽園)、神戸メリケンビル(旧神戸郵船ビル)(中央区海岸通 1-1-1)、海岸ビルヂング(中央区海岸通 3-1-5)、神戸市水の科学博物館(兵庫区楠谷町 37-1)など。
關一銅像	大阪府大阪市北区中之島 1-1-26 大阪市立東洋陶磁美術館前	Ⅱ(2)に関連。

大阪府と兵庫県に存するドイツ関連史跡の総合的検討

多摩聖蹟記念館	東京都多摩市連光寺 5-1-1	Ⅱ (2)に関連。設計者の一人である蔵田周忠 (1895-1966) はパウハウスを訪問。
三岸アトリエ / アトリエ M	東京都中野区上鷲宮 2-2-16	Ⅱ (2)に関連。三岸好太郎 (1903-1934) のアトリエ。山脇巖が設計。
ロシア兵墓地	大阪府泉大津市春日町 19-13	Ⅱ (3)に関連。
浜寺公園	大阪府堺市西区浜寺公園町	Ⅱ (3)に関連。園内に日露友好の像。近隣に浜寺俘虜 (捕虜) 収容所跡地の説明板 (高師浜 4-10-1)。
東福寺派塔頭 霊雲院	京都府京都市東山区本町 15-801	Ⅱ (3)に関連。ロシア兵捕虜関連の展示。
日露友好の丘	長崎県対馬市上対馬町西泊	Ⅱ (3)に関連。日露戦争百周年記念で建立。
ロシア兵墓地	愛媛県松山市御幸 1-531-2	Ⅱ (3)に関連。第一次世界大戦のドイツ兵捕虜の墓も。他に石川県戦没者墓苑 (金沢市野田町)、明治記念堂 (佐渡市千種)、島根県隠岐郡隠岐の島町中町大城の五、福知山市堀にも。
坂の上の雲ミュージアム	愛媛県松山市一番町 3-20	Ⅱ (3)に関連。
イルティッシュ号慰霊碑	島根県江津市和木町 1148-68	Ⅱ (3)に関連。近隣の和木地域コミュニティ交流センター (和木町 570-1) に展示。
ステッセルのピアノ	石川県金沢市末町 10 金沢学院大学	Ⅱ (3)に関連。
記念艦三笠	神奈川県横須賀市稲岡町 82-19	Ⅱ (3)に関連。
東郷神社	福岡県福津市渡 1815-1	Ⅱ (3)に関連。戦艦三笠の主砲の先端部。大峰山の山頂に日本海海戦記念碑。日本各地に東郷神社、児玉神社、乃木神社。宗像大社の神宝館 (渡 1238) に戦艦三笠の現物の羅針儀を所蔵。
宝塚歌劇の殿堂	兵庫県宝塚市栄町 1-1	Ⅱ (4)に関連。
帝国劇場		Ⅱ (4)に関連。旧劇場の「翁面」が残る。
高砂通運旧本店	兵庫県高砂市高砂町鍛冶屋町 1603-1	Ⅱ (5)に関連。
美濃部親子文庫	兵庫県高砂市高砂町横町 1099-1 高砂公民館	Ⅱ (5)に関連。近隣に美濃部達吉生家跡 (高砂町材木町)。
和辻哲郎の生家の碑	兵庫県姫路市仁豊野 309	Ⅱ (5)に関連。
姫路文学館	兵庫県姫路市山野井町 84	Ⅱ (5)に関連。
霞城館	兵庫県たつの市龍野町上霞城 30-3	Ⅱ (5)に関連。
白鷺山公園「哲学の道」	兵庫県たつの市龍野町中霞城	Ⅱ (5)に関連。三木清哲学碑。
旧川喜多邸別邸 (旧和辻邸)	神奈川県鎌倉市雪ノ下 2-2	Ⅱ (5)に関連。
田中正平博士顕彰碑	兵庫県南あわじ市賀集八幡 734 賀集八幡神社	Ⅱ (6)に関連。
京都女子学園建学記念館「錦華殿」	京都府京都市東山区今熊野北日吉町 35	Ⅱ (6)に関連。純正調オルガンを所有。他に国立音楽大学楽器学資料館 (東京都立川市柏町 5-5-1)、民音音楽博物館 (東京都新宿区信濃町 8)、浜松市楽器博物館 (静岡県浜松市中区中央 3-9-1) にも。
国歌君代発祥之地	神奈川県横浜市中区妙香寺台 8	Ⅱ (6)に関連。
加藤弘之生家	兵庫県豊岡市出石町下谷 10-1	Ⅱ (7)に関連。
明治館	兵庫県豊岡市出石町魚屋 20	Ⅱ (7)に関連。
蕃書調所跡	東京都千代田区九段北 1-3-2	Ⅱ (7)に関連。

大阪舎密局跡	大阪府大阪市中央区大手前 3-1	舎密局は京大の前身。リッターらに関与。オランダ人化学者ハラタマ (Koensraad Wolter Gratama 1831-88) の顕彰碑。京都舎密局跡 (京都市中京区鉾田町) も。
阪神甲子園球場	兵庫県西宮市甲子園町 1-82	ドイツ兵捕虜のウォルシュケ (Friedrich Hermann Wolschke 1893-1963) が1934年に初めてホットドックを販売。
フロインドリーブ生田店	兵庫県神戸市中央区生田町 4-6-15	ヴォーリス (William Merrell Vories 1880-1964) 設計の旧神戸ユニオン教会。ドイツ兵捕虜のフロインドリーブ (Heinrich Freundlieb 1884-1955) は解放後に日本でパン屋・洋菓子屋・レストランを経営。私宅は北野物語館中央区北野町 3-1-31) に所在。
ドイツクラブ (クラブコンコルディア) 跡	兵庫県神戸市中央区山本通 2-14-1 メディセオ北野坂ビル	
神戸ユダヤ共同体 (神戸ジュエコム) 跡地	兵庫県神戸市中央区山本通 1-4-28	
風見鶏の館	兵庫県神戸市中央区北野町 3-13-3	デ・ラランデ (Georg de Lalande 1872-1914) が設計、ドイツ人貿易商の住宅。重文。市内のドイツ関連の洋館としてラインの館 (北野町 2-10-24)、旧シャープ住宅 (重文) (北野町 3-10-11)、旧ハンター住宅 (重文) (灘区王子町 3-1)、旧グッゲンハイム邸 (垂水区塩屋町 3-5-17) など。
トアロード	兵庫県神戸市中央区	1908～50年に沿道にトアホテルが存在。
小林聖心女子学院本館	兵庫県宝塚市塔の町 3-113	レーモンド (Antonin Raymond 1888-1976) が設計。
青野原俘虜収容所跡地	兵庫県加西市青野原町	